

論 説

生命史観と唯物史観の統合

——自然順応型文明の高次復活のために（上）——

藤 岡 惇

「人は皆 山河に生れ……生命をつなぎ 生命を刻む そして 終いには 山河に還る。
顧みて 恥じることない 足跡を山に 残したろうか……愛する人の瞳に俺の山河は
美しいかと」
（小椋佳『山河』）

「多様性を称える，生命を称える」 （サガルマタ宣言，カトマンズ，1996年3月）

目次

はじめに

1. 解決を迫られている5大課題
 2. 137億年前にモノが生まれ，イノチの進化につながった
 3. 250万年前に自然から「社会」の分離が始まった——群をなし，食料恵受の移動が本格化
 4. 1万年前に「農業革命」がおこり，食料生産と定住が始まった
 5. 6千年前に国家が生まれ，ヒトの家畜化=奴隷化が始まった……以上（上）
 6. 4千年前に社会から市場経済が分離し，独走を始めた……以下（下）
 7. 250年前に資本主義という「逆三角形」社会が本格化
 8. 人類史のなかの資本主義の位置と限界——未来社会のイメージ
 9. 自然順応型文明への平和的転換のカギ——経済システムの変革
 10. もう一つのカギ——わがイノチを「コモン」に，「脱家畜の文化」へ
- 補論 マルクス・レーニン主義の「唯物史観」の弱点

はじめに

抑圧のない未来社会の実現を夢見ていた私は，とくに若い頃は，中国で進むという「新社会」の建設に，なにほどこか希望を託していました。19歳の夏，文化大革命が始まった直後の中国各地を回ったこともありました。しかし文化大革命の実態，カンボジアのポルポト政権時代の惨状，それにスターリン統治下のソ連の実態を知るにつけて，イノチの尊厳と人間の尊厳を軽視した「新社会」には未来がないことが分かってきました。

20世紀の末に「ソ連型社会主義」はみじめな破産をとげました。結局，「軍隊党型国家産業主義」から前進できずに，崩壊したのです。¹⁾

他方、中国の体制は、「中華帝国主義」の方向に変質しています。これら「旧社会主義国」の体制を理論づけてきた歴史観の体系がマルクス・レーニン主義（ボルシェビズム）の「唯物史観」でした。

他方、現代資本主義の方も、深刻な危機に陥り、混迷を極めています。「唯物史観」の考え方を全面否定してしまうことは、「たらいの水と一緒に赤子を流す」恐れがあります。不十分な点はどこにあったのか、慎重に見極めていきたいもの。本稿は、生命史観の特殊な部分理論として、「唯物史観」を位置づけ、生命史観のなかに包摂することで、「唯物史観」の高次再生を図ろうとする試みです。

マルクスが、晩年期に至って、（非暴力）アナキズムの方向に回帰（ないし進化）しつつあったことに私は注目しています。この点を踏まえると、老子（中国）、ガンジー（インド）、宮沢賢治（日本）と晩期マルクスとの間には、ある種の共通項が浮かんでくるようにも思えます。両者を歴史観のうえで統合しようとする試みが、本稿だと言うこともできるでしょう。²⁾

1. 解決を迫られている5大課題

「変えることのできるものを変える勇気と、変えることのできないものを受け容れる心の優しさ、いずれであるかを見分けることのできる叡智を私に与えてください³⁾」
（ラインホルド・ニーバー『平安の祈り』から）

地球上のどこに住まおうが、人間生存の土台を覆しかねない5つの危機が、進んでいます。

第1に、この惑星が温暖化局面に入って1万年余が経ちました。この間に大量の水が溶け、60メートルも海面が上昇し、氷河はフィヨルドに変わり、陸地は大きく縮小しました。加えて数十年前から、人為的原因によって温暖化が加速する時代が始まったのです。異常気象が、貧困化に苦しむ紛争多発地帯を直撃しています。

第2に、新型コロナウイルスが動物界から人間社会に侵入し、世界的規模の疫病（パンデミック）危機に見舞われた問題です。地球上に生きる哺乳類の総重量11億トンのうち27%をヒト、64%を家畜が占めるに至り、野生動物の重量比はわずか9%に激減⁴⁾しています。疫病禍の根底には、野生動物の家畜化、人口増、生物多様性の減少、ヒトの高速移動と密集化の問題があるだけに、グローバル資本主義のシステムを維持する限り、疫病は繰り返し出現し、深刻化する恐れがあります。どうすればこの種の疫病に負けない社会を作れるのでしょうか。

第3に1980年代を転機に「新自由主義的な改革」が進みました。資本主義経済は、「修正資本主義＝福祉国家」のタイプから19世紀的な「むき出し資本主義」の時代に逆戻りする様相を深め、貧富の格差が広がるようになったのです。実際、米国では最富裕層7名の資産が、下位半数の1.6億人の資産総額に、世界全体では最富裕層42名の資産が、下位半数の37億人の資産総額に匹敵するに至っています。超格差社会は、デフレ不況を深刻にします。社会連帯の絆を切り裂き、戦争や温暖化の防止も難しくします。労働の生産性の安易な上昇は大量の失業者を生み出すだけ。「人間を失業させるのではなく、エネルギーのほうを失業させる」エコ産業革命が実現できるか

どうかに人類の未来がかかっています⁵⁾。

第4に、宇宙規模の核戦争を阻止し、核兵器を廃絶し、非暴力的な道を通して、平和な社会に移っていくことはできるのか、という問題です。

20世紀末、ソ連などの異質な社会を排除・解体するという第2の総力戦に勝利した後の米国の支配層の間に、宇宙をベースとする新型戦争システムを動員すると、中東の石油資源国の制圧は容易だし、米国による世界支配は安定すると夢想するグループが台頭しました。「ネオコン」と呼ばれたグループです。この戦略をイラクやアラブ世界の反米勢力の転覆のために発動し、イラク・中東戦争を仕掛けます。しかし彼らの起こした戦争は失敗に終わり、逆に中国・ロシア・イランを相手にした宇宙規模の核軍拡競争を招く結果となりました⁶⁾。もし新型の核戦争が天空で起こったならば、地上電力網の全系崩壊がおこるでしょう。原発の炎上と連動すれば、文明崩壊の恐れさえあります。

第5に、ヒトの「自己家畜（社畜）化」に起因する、一連の問題です。教育の市場化が進み、「自己家畜化」に向けた「飼育」を、強烈に受け続けた結果、動植物と会話する能力を失った人、わがイノチを「コモン」（社会の共有基盤）とは思えず、私有財産と考えて閉塞してしまう人、自殺・自傷に走る人、神経過敏症やうつ病の人が増えました。免疫異常、肥満、心臓疾患といった不健康も蔓延しています。共同体（家族や地域社会の絆）の解体が進んだ結果、親しい人に看取られずに死んでいく人が年間10万人。引き取り手のない遺体についていえば、年間3万2千人に達しています。コロナ禍の下、各地の老人施設は孤立し、このような悲劇は加速しています。莫大な軍事費を投じて、平和づくりが進まないのと同様、莫大な教育費、ケアや医療のための費用を投じて、健康づくりも人間の成長も難しくなってきたのです。共同体とコモンを再生し、野生の免疫パワーを蘇らせ、コロナ禍に負けぬ、自己治癒力と生殖・育児の能力に富む、健全な市民を育てていくには、何をすべきなのでしょう。

どんな社会を目指して、どのような運動を興したらよいのか。その大きな海図を描き、信頼できる羅針盤を作り出したいもの。そのための試論を提供することを本稿の目標としたいと思います。

2. 137億年前にモノが生まれ、イノチの進化につながった

「昼となく夜となく 私たちの血管を流れる同じイノチが、地球に遍く流れ、リズムミカルに躍動している。その同じイノチが……無数の草の葉のなかに歎びとして萌え出で、木の葉や花々のざわめく波となってくれる。……いまこの刹那に、幾世代ものイノチの鼓動が、わたしの血のなかに脈打っていると思うと、わたしの誇りは湧きおこってくる。」

（ラビンドラナート・タゴール『ギタンジャリ』69、森本達雄訳より）

このような課題を真に解決していくには、問題の生まれてきた根源を捉えることが必要だと思っています。まずは137億年前の宇宙に戻ってみましょう。

宇宙の創生と進化

137億年前のビッグバン〔宇宙始元の大爆発〕とともに、私たちが知る宇宙が始まります。ビッグバンの時点では、核反応のような極微の世界と宇宙のような極大の世界は溶けあっており、⁷⁾ 区別がなかったのです。極微の世界を探る量子力学と、極大の世界を探る宇宙物理学には、共通の要素が多いのは、そのためだといわれています。⁸⁾

極微の世界から生まれた宇宙は、猛烈なスピードで膨張を始めました。ビッグバン（宇宙誕生）から1万分の1秒に陽子と中性子が生まれ、3分後にはクォークが結合した原子核が形成され、38万年後には、もっとも単純な原子（元素）である水素とヘリウムが形成されました。しかしその他の元素の誕生は、ずーと遅れます。元素を集めた第1世代の原始星が形成されないと、それ以上の進行は難しかったからです。

ビッグバンから2—3億年たった頃に、ようやく宇宙のあちこちで、水素とヘリウムからなる巨大なガス星が誕生しました。太陽の数十倍・数百倍の大きさのガス星の内部では、引力の作用で高温高压の場が生み出され、その結果、原子炉（核融合反応炉）の火が灯りました。光が誕生し、宇宙は「晴れ上がって」いきました。

ガス星の内部では、核融合反応が進み、水素・ヘリウム以外の炭素・シリコン（珪素）といった重い元素が生み出されます。しかし元素の形成は、鉄が限界でした。鉄は最も安定した元素ですので、それ以上の核融合反応は進みにくいのです。

原始的なガス星は短命でして、数百万年を経ると、元素を宇宙空間に放出して一生を終え、第2世代の星を生み出す素材となりました。⁹⁾

鉄より重い元素はどうして誕生したのか。宇宙に存在する星のうち、0・3%が、太陽より8倍以上重い星。「超新星爆発」と呼ばれる爆発で一生を終える星です。その際に巨大なエネルギーが発生し、大量の中性子が鉄などの元素と衝突し、鉄より重い金、銀、プラチナといった重元素を一挙に生み出すのです。このような超新星爆発は、過去に1兆の10万倍程度起こり、そのたびに、重元素が生まれ、拡散し、もっと重い星を生み出す材料となりました。¹⁰⁾

ただし現実の宇宙には、この種の超新星爆発が生み出す量をはるかに上回る重元素が存在していると言います。なぜ、どのようにして生まれたのか。

巨大な星が超新星爆発を起こした際、中心部に高密度の核が残ります。核の半径は10キロメートルほどですが、重さは太陽と同程度。核のところには中性子が密集していますので、「中性子星」と呼ばれます。

もっと巨大な星が超新星爆発を起こしたばあい、さらに密度の高い天体が中心部に残ります。中心部の引力は強烈すぎて、光線はもちろん、放射線も電磁波も外に出られない——これが「ブラックホール」の正体です。

このような中性子星やブラックホールが出会い、合体する際、超新星爆発をはるかに上回るエネルギーが生まれ、金、銀、プラチナ、ウラニウムといった重い元素が大量に誕生したのです。

宇宙誕生から5億年ほど経った頃、各所に原始的な銀河が誕生します。銀河同士の交錯や合体の際には、超新星爆発が頻発し、中性子星やブラックホールの合体が促進された結果、さらに多くの重元素が生まれたといわれます。

超新星爆発が起こった直後の空間を想像してみましょう。そこは多彩な元素が次々と生まれる

空間です。この場で、人体を形づくる元素が、すべて誕生したそうです。動物や植物、さらには私たち人体を形作る素材はすべて、超新星爆発直後の星くず（スター・ダスト）から生まれたとは、驚きです。地球上の生命体の起源は一つ、超新星爆発です。あらゆるイノチは、すべて「星の子」として誕生した兄弟同士なのです¹¹⁾。

物質というのは、原子から分子へ、さらに複雑な分子化合物へと進化・発展していくのですが、これらの高分子を豊富に含む星間分子雲（暗黒星雲）も誕生しました¹²⁾。

幾度となく繰り返される「宇宙の陣痛」のなかから、分子雲が生まれ、化学反応が進み、有機物質が生まれてきた。イノチの材料は、自然界の内発的な自己組織化パワーのおかげで誕生したわけです。宇宙の外には全能の人格神がいて、神が外から万物を創造したという「創世記神話」は説得力を失ったのです¹³⁾。

46億年前に地球が生まれ、生命維持のしくみが出る

宇宙誕生から87億年後、今日から見ると50億年前になりますが、4つほどの星の残骸が、偶然、銀河系銀河の一角に集まり、相互の引力で引き寄せ合い、太陽を誕生させました。太陽というのは、第3世代ないし第4世代の普通の星の一つです。

それから4億年が経ち、今から46億年前に、太陽を周回する惑星の一つとして、地球が生まれます。当時の大気のはほとんどは二酸化炭素だったため温室効果が起こり、地球の表面は、現在の金星並みの灼熱の世界でした。

イノチの母体となったのは、単細胞の微生物たち。動物界・植物界に分かれる前の多様な微生物たちでした¹⁴⁾。材料となったのは、地球外の隕石などから持ち込まれた、さまざまな有機分子たち。これらが「原始の海」のなかで集合し、太陽からの適度な紫外線の作用で結合し、38億年前に最初のイノチが誕生したと言われます。

イノチとは何でしょうか。①自他を分ける「膜」があること、②外部から有用物を取り入れ、不要物を排出する「物質代謝」を行っていること、③次世代にイノチにつなぐこと——これら3点が備わっていること¹⁵⁾。コロナウイルスには、②が欠けています。

「生きよう、生きよう」とするイノチの強靱さの一端を、日本の海洋研究開発機構のチームが明らかにしました。2010年に南太平洋の水深3700—5700メートルの海底7か所から土を採取したところ、1億年前の微生物が仮死状態にいることが判明。えさを与えたところ、微生物は1億年の眠りから覚め、えさを食べ始め、5日後には分裂活動を再開。2か月後には1万倍以上に増殖したのです¹⁶⁾。

原始の海のなかで、微生物の一部は、植物に進化します。植物たちは光合成をおこない、二酸化炭素を炭素と酸素に分解。炭素は石灰岩となって海底に沈みこみ、酸素は大気中に放出され、酸素濃度を高めます。酸素の一部は紫外線と反応してオゾン（O₃）となり、地上15キロから50キロメートルのところにオゾン層を形成します。陸地でも有害な紫外線をシャットアウトするしくみが作られたのです。

こうして6億年前になると、生物が陸に上っても生きられる環境が整い、まず植物が上陸。地上でも光合成が進むようになると、大気中の二酸化炭素濃度は低下し、気温も下がります。植物の繁茂が進むと、光合成の進行に拍車がかかります。こうして二酸化炭素濃度は0.04%、酸素濃度

21%という理想的な環境が作り出され、哺乳類の上陸に至ったわけ¹⁷⁾です。

地上から100キロまでを大気圏といいます。なかでも、雲が生まれ、雨が降る対流圏というのは11キロメートルの厚みしかない。地球の直径は1.3万キロですから、りんごの表皮よりも薄い。大切にケアしなければ壊れてしまいます。¹⁸⁾

イノチの尊厳、人間の尊厳

イノチの誕生直後から26億年の間は、細胞分裂というかたちでの無性生殖が、繁殖の唯一の方法でした。この時代には個体の死はなく、イノチは永遠の生を楽しむことができた。雄と雌とが互いのDNA（遺伝子コード）を交じり合わせ、子を生み出すという有性生殖がはじまって、個体の死が始まりました。セックスの喜びを味わう代償として、私たち高等生物は、死の恐怖に直面するようになったのです。¹⁹⁾

有性生殖の積み重ねのなかで、子供に引き継がれるDNA（細胞のなかの遺伝子コードを伝える糸状の物質）は複雑になります。その精華として誕生したのがヒトです。生物の進化の歩みを手で表したばあい、その最先端の指先のところに、「自然がついに自分自身の意識にまで到達している存在」が生み出されたわけです。

一人の人間のなかに60兆の細胞が素晴らしい協同の活動をして、人間活動を支えています。「人間とは36億年のDNA……。36億年の歴史を持つDNAの発する強い力と、たかだか数万年の歴史しか持たない自我との間の葛藤に苦しんでいるのが人間です」と生物学者の柳澤桂子が述べていますが、至言だと思えます。²⁰⁾

一人のなかに含まれるDNAの総延長は、1080億キロですので、地球と太陽を360回往復する長さになります。²¹⁾自然界に内在する不思議な自己組織化のパワーのおかげで、宇宙の物質系は、ここまで進化をとげたのです。²²⁾

イノチはなぜ尊いのでしょうか。わけてもヒトのイノチは、なぜ尊いのでしょうか。60兆の細胞が、1千億キロ余のDNAに導かれて、自らの力で宇宙の最高の精華としての光を発しているからだと思えます。

「わが体内には360回巻くだけの長さのDNAがある」という事実を私たちが知ったことの意味は何でしょうか。宇宙が生み出した「自己認識装置」というのが、私たちの位置であり、使命だということではないでしょうか。宇宙の「コモン」（共有財産）であるかどうかは、私たちの行動結果によって判別するほかないのですが、137億年の歳月をかけて、宇宙が生み出した「最高傑作」の一つであることは間違いないでしょう。私たち以外にも、高等知能をもった異星人を意外と多数、宇宙は生み出しているかも知れませんので、「唯一の最高傑作」とまでは言えないでしょうが……。

私たちが宇宙の「至高の創造物」であるとするれば、私たちが担っていくべき「義務」とは何か。この点には、後に立ち戻ろうと思えます。²³⁾

3. 250万年前に自然から「社会」の分離が始まった ——群をなし、食料恵受の移動が本格化

「古代の狩猟採集民は、知識と技能の点で歴史上最も優れていた。……狩りは3日に1日で、採集は毎日わずか3—6時間だ。……背が高く、健康だった……動き回っていたので、感染症は蔓延のしようがない……彼らはたえず微笑み、人に威張り散らすことはなかった。財産は乏しいのに極端なほど気前が良く、成功や富に執着²⁴⁾することはなかった」
(ユヴァル・ノア・ハラリ)

草原に降り立ち、群を作って生きる——自然からの社会の枝分かれ

類人猿は、長年、樹上に住み、果実を常食としてきましたが、700万年前になると、樹上と地上を行き来する種が生まれてきました。250万年前になると、樹上の生活を完全に放棄し、食料を求めて、狩猟と採集の移動生活に移った種が生まれます。「直立原人」と呼ばれる彼らが、ヒトの直系の祖先²⁵⁾です。

直立歩行に移ったため、脳が重くなっても、背骨で支えることができます。200万年前から130万年前までの間に、脳の大きさは2倍に増え、社会的な活動の発展を支える役割を果たしました²⁶⁾。その後、脳の拡大スピードは鈍り、7万年前から後はほとんど変わっていません。

直立のおかげで手と足との機能が分かれ、石づくりのナイフや槍といった原始的な道具を製作できるようになりました。しかし1万年前に農業革命が来るまでは、道具の性能には、ほとんど変化はありませんでした。

それでは何が進歩したのか。狩猟とともに肉食が広がります。30万年前に火が日常的に使われるようになると、調理の幅が広がり、消化時間も短縮されます。そのため、ヒトの顎骨と口腔が小さくなり、小腸・大腸など消化器官が短くなり、脚力が発達し、一日に数十キロを走破できるようになりました²⁷⁾。牛馬は、一日の大半を栄養の摂取と消化のために費やしますが、ヒトがばあい、生存のために必要な労働時間は大幅に短縮され、社会的な交流・交歓に費やす自由な時間が²⁸⁾増え、複雑で大きな集団を作れるようになりました²⁹⁾。変化は、生産力＝自然改造力の向上ではなく、社会力（子育て力と協働力）の向上という姿で現れたのです。

原初の豊かな社会

250万年前から1万年前の間、連綿と続いた食料恵受にもとづく狩猟・採集民の社会の特徴について、ハラリは、こう描いています。

「農業革命（食料生産革命）の前夜の世界には500—800万の狩猟採集民が住んでいた。……個人のレベルでは古代の狩猟採集民は、知識と技能の点で歴史上最も優れていた。……狩りは3日に1日で、採集は毎日わずか3—6時間だ。通常これで集団が食べていかれる。……そんな調子だから、噂話をしたり、物語を語ったり、子供たちと遊んだり、ただぶらぶらしたりする時間がたっぷりある。……狩猟採集で手に入る食物からは理想的な栄養が得られた。…平素から何十種類もの食べ物を口にし、子孫の農耕民よりも、飢えたり栄養不良となったりすることが少なく、一

般に背が高く、健康だった。……感染症のほとんどは家畜に由来し、農業革命以後に、人類も感染し始めた。犬しか飼いならしていなかった古代の狩猟・採集民は、そうした疫病を免れた。（また彼らは）小さな集団で動き回っていたので、感染症は蔓延のしようがなかった。……大人同士の暴力行為は非常に稀であった。男性も女性も、自由にパートナーを替えることができた。彼らはたえず微笑み、……人に威張り散らすことはなかった。財産は乏しいのに極端なほど気前が良く、成功や富に執着することはなかった。彼らが人生で最も大切にすることは、他者との良好な交流と質の高い交友関係³⁰⁾だった。」

自然恵受の「生存維持経済」の安定性

200万年—1万年前の食料恵受の移動生活時代は、ほぼ定常型で伝染病の少ない社会が続いていました。

狩猟採取の時代は、自然との物質代謝関係は、自然の恵みを受け取るという面が中心です。移動しますし、獲物の動物の肉は長期保存できません。蓄えや財産を蓄えることは無意味。その面からも、石器の効率を高め、採取や狩猟の効率を高めるというインセンティブは働きません。生産力という点ではほぼ同じ、定常的な社会が、続きました。

移動する集団（バンド）は、1—4の母系大家族からなる数十名の規模が普通。150名の規模に達することは稀でした。規模が大きくなりすぎると、結束が緩み、バンドの協働力が落ちてしまうからです。

原始共同体（原始共産制）の社会は、生産＝自然の改造・征服ではなく、ケア（世話をすること）を最重視した社会でした。「ケア」とは何か。ヒトのイノチの関わる生物学的なニーズを満たし、「良き市民への人間発達」を支援し、病気になっても、不必要な苦難を緩和し、イノチを輝かせつつ人生を全うすることを保障する営みのこと。自然基盤の修復・保全、動植物の生命活動にも、ケアの対象が広がります³¹⁾。

200万年もの間、連綿として続いてきた「原始共同体」社会（日本周辺では数万年の間続いた「縄文人社会」）というのは、自然の共有資産（コモン）が蓄える食料資源の恵みに出会い、そのまま受け取る自然順応社会であり、動植物とも対話・共感しあえる能力を持ち、自然の恵みを人間の発達保障と自然コモンと共同体コモンの修復・保全のために活かす社会³²⁾でした。未来社会のありかたを考えるうえで、学ぶことの多い社会だと思います。

生殖・子育て共同体＝母系大家族の形成

直立歩行に伴う脳の肥大化は、メスの出産と子育て（次世代の再生産）に特別な困難を作り出しました。メスの骨盤が変化し、産道が扁平となり、頭部の肥大化した胎児を通すことが難しくなったのです。メスがとった解決策というのは、赤ん坊を未熟児のまま産み落とすことでした。未熟児を生んだ母子の生活を支えるために、餌を集めてくるオスの協力が必要不可欠となりました³³⁾。

発情期以外の時期でも性交ができるようにメスは体を変化させ、オスを子育て協力に誘います。こうして父親も加わり、未熟児の子育てを担う家族が生まれてきたのです。類人猿のなかではボノボ（ピグミーチンパンジー）のメスも、よく似たセックス行動をとりますが、オスを巻き込み、

性愛とケアを基盤とする家族の形成にまで行きついたのは、ヒトだけです。

イスラエルの文明史家のハラリはこう書いています。「彼らは私有財産も、一夫一婦制の関係も持たず、男性には父権さえない原始共同体（コミュン）で暮らしていた。そのような集団では、女性は同時に複数の男性（および女性）と性的な関係を持ち、親密な絆を形成することが可能で、集団の成人全員が協力して子育てに当たった。男性はどれが我が子か断定できないため、³⁵⁾どの子供も同等に気遣った。」

食料恵受時代の狩猟・採集民にとって、このような母系制大家族が、ほぼ唯一の家族形態でした。猿やチンパンジーの世界では、オスを子育てのケアの世界に誘うことは難しく、メスを発情させようと、オスによる子供殺しが頻発します。この種の蛮行を阻止し、オスを子育て共同体に編入し、より良い後継者を育成するうえで、母系制大家族というのは、理想的な制度でした。そのためこの制度は、何十万年もの間、連綿と続き、次世代の健全育成に役立ってきたのです。

食料生産（農耕・牧畜）革命と階級社会の成立を契機に、この制度は力を失い、家父長制的な一夫一婦婚が主流の座を占めるようになります。とはいえ征服国家の介入・支配に抵抗し、「³⁶⁾国家なき桃源郷」を守り抜いた中国の奥地やブータン東部地域では、今も残っていますし、³⁷⁾欧米社会では、母系親族が支える「母子家庭」という姿で、復活しています。

7万年前——言語と文化が発生し、150名を越える社会が生まれた

20—30万年前に現生人類（ホモ・サピエンス）が現れ、7万年前になると、サピエンスの脳は、ほぼ現在と同じ構造になったようです。サピエンスは、短い引っ込んだ顔のおかげで、明瞭に聞き取れる言語音を発することができ、7万年前には言語を介した対話（コミュニケーション）が始まったとされます。³⁸⁾

言語の使用は、コミュニケーションの質を一挙に高め、成員の想像力と創造力を解放しました。過去の行動をふりかえり、失敗を反省し、成功の理由を交流できると、よりよい方針を策定することができます。共同体の歴史、成否の教訓を「ストーリー」として描き、伝承できれば、共同体は前進できるでしょう。

社会（共同体）とは、「ヒトづくり」の場だとしますと、「ヒトはどう生きるべきか」を問い、「善き生き方」を探究・交流し、その「理想を形」にして、次世代に伝承する営みのことを「文化」と呼びます。

共同体にとって、文化とは「社会」の目的・価値を創る営みであり、社会成員を結束させる紐帯・接着剤の役割を果たします。「文化」活動を旺盛に展開すると、「社会」の結びつきが強くなります。

3.5万年前に宗教祭祀が誕生、社会結束が強化

祭祀の際の共同の祈りが、社会の結束を一層強くしました。3.5万年前に、「狩の成功を祈る」最初の原始的宗教＝アニミズムが洞穴のなかで生まれました。³⁹⁾矢を射られたバイソンなどの獲物を洞窟の壁に細密に描きだすなど、「芸術」（アート）の原型も生み出されました。⁴⁰⁾1.5万—2万年前のフランスのラスコー洞窟の壁画が有名です。

こうして150名の壁を突破して社会を築くことが可能になり、2—3万年前になると、1千名

規模の「社会」形成が展望できるところまで来たのです。

アニミズムの世界観と狩猟観

サピエンスの宗教的な心情は、アニミズムの色合いの濃いものでした。先のハラリはこう書いています。「アニミズムとは、……動植物、自然現象には意識と感情があり、人間と直接思いを通わせられるという信念だ。……猟師は鹿の群れに話しかけ、そのうち一頭が自らを犠牲にしてくれるように頼む……、もし狩りがうまくいけば、猟師は死んだ鹿に許しを乞う。……こうしたコミュニケーション行為（の相手）はみな、地元⁴¹⁾の存在だ、……普遍的な（人格）神ではなく、特定の鹿や木、小川、死者の霊などだ」と。

同様のことを、「地球交響曲」を製作してきた映画監督の龍村仁も、次のように書いています。舞台は、南アフリカのナミブ砂漠を舞台にする狩猟民ブッシュマン。「ブッシュマンの人々は、およそ2万年もの間道具をほとんど進歩させてこなかった。……（それには）深い理由があり、……（自然恵受のための）叡智が隠されていたのだ。……ブッシュマンの弓の射的距離は20-30メートル。……これにくらべて、現代の密猟者が使うマシンガンの威力は桁違いだ。…何より、人間は楽ができる。しかし、そのことによって、（現代人は）最も大切なもの」、生きるとは「“生命の移しかえ”である」ことを忘れてきた、と。

龍村はこう続けます。「弱い弓を使って狩りをするには、まず警戒心を起こさせずに動物に近づくことができるか否かが鍵になる。……（そのためには）自分自身が、その動物になりきるのだ。……ブッシュマンの狩人たちは、……道具としての弓を進歩させる代わりに、自分たちの“気”を自在に操り、いつでも象や鹿たちと同調できる能力をたかめていった。……だから彼らは、動物とも、植物とも、そして自然現象とも話ができる。狩りに出て大きな鹿の群れと出会ったとき、今日、どの“個体”が彼らに生命を与えてくれるのかは、鹿のほうから教えてくれる、と彼らは言う。だから決して、……妊娠中のメスや子育て中の母、群れに必要なリーダーなどは射たない。彼らが鹿を獲るのではなく、鹿のほうで彼らに生命を分かち与えてくれるのだから。

弱い弓で射られた大きな鹿は、決してその場では倒れない。矢じりの先に塗られた昆虫の毒が全身にまわって力尽きるまで何日もかかる。その間、…根気よく追跡し続ける。……この追跡は、“生命を与える者”と“与えられる者”との間で行われる……過酷で神聖な儀式である。……そして“与える者”が“与えること”を心から受け入れた時、この儀式は終わる。

だからブッシュマンの人々は、倒された鹿の肉体を一片たりとも無駄にはしない。肉は食べ物になり、皮は衣服、骨は矢じりや針……になり、もう一度、別の生命を生きるのだ。……倒した鹿の生命が自分の身体の中に生きていることを……“気”の同調や交信を通して知っていたのだ⁴²⁾と。このように龍村は解説します。文化人類学者のジェイムス・スーズマンも、同じカラハリ砂漠の狩猟民を対象とした調査を行い、同様の結論に達しています⁴³⁾。

5—6万年前 アフリカから世界に広がったサピエンス

約5—6万年前の頃、アフリカで狩猟・採集の移動をしていたサピエンスの一部が、アラビア半島に移住し、そこから欧州・中央アジア・中国、そして南北アメリカにまで拡散するきっかけとなります。彼らは、欧州やアジア各地に進出する途上で、サピエンスの親戚筋にあたるネアン

デルタール人やデニソワ人と出会い、混血しています。ネアンデルタール人は4万年前には死滅していますが、現代人の遺伝子の1—4%は、彼ら由来のものだと推定されています。ネアンデルタール人の遺伝子も、私たちの中に確実に引き継がれているのです⁴⁴⁾。

現生人類（サピエンス）は、その後、氷河期に海面が低下し、陸続きとなったベーリング海峡を渡って、北アメリカ大陸に進出。南アメリカの南端にたどり着いたのが1万年前です。

彼らは多様な自然環境に自らの肉体の姿を適応させ、知恵をしばって最適の衣食住の様式を練り上げていきます。たとえば極北では、体表から熱を逃げにくくするために、体毛が発達し、皮下脂肪がたまり、まぶたは一重となりました。顔面からの熱の放出を減らすために、鼻が低く平らな顔となり、砂嵐の多い地域では、眼に砂が入りにくいように細目の人が増えました。

アフリカを旅たつ時点では、彼らは同一の部族に属する数千名規模の集団でした。アフリカ外に広がった現代人は70億人にのぼりますが、もとをたどれば、数千名の集団を共通の祖先とする子孫たちなのです⁴⁵⁾。アフリカ出発時には、共通した祖語を用いていましたが、異なる風土に適応するなかで、彼らの言語も分化し、今日のような数千種の言語に分かれていきました。肌の色、骨格、体毛といった肉体的な面でも、宗教、文化、習慣といった面でも、多彩な民族集団に分化していったわけです⁴⁶⁾。

皮相な「人種主義」の誤り

ヒトの外面だけを見て、白人は黒人よりも優秀、白人のなかでもゲルマン系やアングロサクソン系が一番優秀だとか、アジア系のなかでは日本人は朝鮮人よりも優秀だと主張する「人種主義者」が今でも残っています。しかし5—6万年前にさかのぼると、数千名規模の共通の祖先に行きつくわけですから、ヒトとしての本性・能力は基本的に同一。どこに住んでいようと現代人の遺伝子（DNA）の配列のうち、99.9%以上が同じです。

同じ性能の自動車であっても、ボディーの色や、アクセサリ、デザインを少し化粧直ただけで、「画期的な新製品」として売り出されることがあります。「人種主義者」というのは、このような自動車メーカーと似ています⁴⁷⁾。ヒトの表層だけを見て本質を速断する、愚かな主張です。

末期には過剰狩猟が始まる

食料恵受時代の末期になりますと、サピエンスは社会的協働の力があまりに強力だったため、過剰な狩猟を行うようになります。7万年前の認知革命の頃に地球には、大型の哺乳動物がおよそ200種、生息していました。それが農業革命が始まる1万年前には、100種しか残っていなかった。ホモ・サピエンスは、大型哺乳類の半分をこの間に絶滅に追い込んだのです。しかし、これは、野生動物の絶滅運動の第1波にすぎませんでした。1万年前の農業革命以降に、はるかに強烈な第2波が起り、250年前の産業革命をきっかけに、未曾有の第3波が続いたからです⁴⁸⁾。

4. 1万年前に「農業革命」がおこり、食料生産と定住が始まった

米国のアナーキスト人類学者で活動家のジェームズ・C・スコットは、『反穀物の人類史——

国家誕生のディープヒストリー』（立木勝訳）みすず書房、2019年12月⁴⁹⁾という優れた本を書きました。この本の論旨を紹介しつつ、「農業革命」と国家誕生の関係を考えてみたいと思います。

イラク南部のチグリス川とユーフラテス川が作り出す豊かな沖積平野のメソポタミア南部地域で、人類史を画する「農業革命」（食料生産革命）が動き出しました。それまでは、野生動物を狩猟するという形であれ、野生食物を採集するという形であれ、自然が提供する恵みを発見し、そのまま受け取るという動物と同じレベルの活動でした。それが、計画的に動物を家畜にして、計画的に飼いならし、食肉にする、あるいは特定の食物を作物として種まきし、育て、収穫するという「生産」に変えたわけです。自然に順応することから、自然に人間の意志を押し付け、自然のしくみを意図的に改造する方向に転換したのです。今から1万年前の頃です。250万年の人類史を1年に見立てると、年末も押し迫った12月30日の正午すぎの時です。

狩猟・採取の遊動生活と農耕・牧畜の生活を行きつ戻りつする過渡期が、その後2千年ほど続きますが、今から8000年前に、この地に定住民の集落が形成され、7000年前になると、数百の村が存在し、小麦・大麦などの作物化した穀物が栽培され、主食として供されていたことは疑いありません⁵⁰⁾。

家畜化の弊害

野生動物を家畜にすると、野生のパワーを失い、ペットのようになります。警戒心や瞬発力が低下し、免疫力が衰え、各種の感染症に罹りやすくなります。成長後も幼体性を残す、脳が縮小する、メスとオスの差が縮小することが多くなります⁵¹⁾。

同様の影響は、ヒトにも見られます。狩猟・採集時代の共同体民は、多様な仕事を自発的に担う全面的に発達した人格に育つ素地がありましたが、農業革命を経るなかで、穀物と牧畜の都合にあわせた、重労働を強いられ、自然界への注意力と実践的知識を失い、食事の多様性を失い、自由な時間を減らしたのです。健康悪化のため、近隣の狩猟再採集民より、5センチ以上も身長が低くなったほどです。それだけでなく、定住と密集、糞便投棄のために、メソポタミア地域の村落や都市は、繰り返し感染症に襲われ、壊滅的な打撃を受けることが多くなりました⁵²⁾。

こうして、ヒトは自然の支配者となり、自然を改造し、生産していくという生活への転換が始まったのです。共同体や母系大家族生存のための範囲を越えて、腐りにくい穀物を集中的に栽培させるといった、生産方法の専門化が進みました。また野生動物の狩猟という数十万年間続いてきた生活も、遊牧や移牧といった過渡的な段階を経つつ、動物を家畜にし、特定の牧場で放牧・飼育する牧畜という様式に移っていききました⁵³⁾。

5. 6千年前に国家が生まれ、ヒトの家畜化＝奴隷化が始まった

『苛政は虎よりも猛し』とは孔子の言葉。孔子の一行が、墓前で泣く女性に理由を聞くと『夫、夫の父に加え、今度は息子まで虎に殺されたからです』と答えます。なぜこんな危ない土地を離れないのかとさらに問うと、女はこう答えました。『ここにはひどい独裁者はいないからです』⁵⁴⁾と

5200年前には都市国家ができていた

メソポタミアで進んだ初期国家の形成プロセスを、先のスコットは、こう説明しています。メソポタミア沖積平野の一角のバビロニアのウルクには、5200年前の段階で、250ヘクタールの市域を囲む城壁が築かれていました。都市人口は、2.5万人以上と推定されます。4500年前になると、この地域には、同様の都市国家が20ほど生まれていました⁵⁵⁾。3000年前になると、エジプト・中国でも、同様の都市国家が生まれ、職業的な軍人や、徴税役人が誕生しました。同時期に文字が発明され、徴税記録を残す書記が生まれています⁵⁶⁾。

穀物が国家を作った

古代の最初の国家は、メソポタミアだけでなく、エジプト、インダス河流域、黄河など、どこでも穀物を基盤にした国家でした。タロイモ・エンドウ豆といった作物も栽培されていたにもかかわらず、なぜ穀物だけが重視されたのでしょうか。課税の対象として、穀物が最適だからです。穀物は同時に実るので、徴税官には、目視しやすいし、脱税しにくい。そこで農民たちは、穀物の栽培を強要され、収穫した穀物の最低でも2割は、徴税官は都市に持ち帰り、官吏と軍隊を養っただろうとスコットは推定します⁵⁷⁾。

重税と徴兵、穀物栽培の強制に抗して農民たちは抵抗し、国家の外に逃げ出し、豊かな山野に戻り、そこに桃源郷を作り、元来の自由な狩猟・採集の生活に戻ろうとする運動が繰り返されます。

戦争による奴隷の調達、防壁の建設

解決策は、壁を築き、領民の脱走・逃散を防止すること、戦争を繰り返し行い、穀物作を従順に行う奴隷をたえず調達することでした。原始国家は、本性上、不安定であり、遊牧民族の来襲によってくずされただけでなく、領民や奴隷の国家領域外への脱走と反乱、さらには伝染病の蔓延や森林破壊、塩害に直面して、簡単に崩壊し、解体していったのです。じっさい、メソポタミアでは、3800年前から後の1千年の間、都市定住者の数は激減しており、都市国家・王国の崩壊が繰り返されています⁵⁸⁾。

中国史家のオーウェン・ラティモアは、中国の万里の長城をリサーチし、長城は、野蛮な遊牧民を領域に入れないためだけでなく、国内の納税者・耕作者が自由な大地に逃げ出すのを封じるという目的もあったと論じています⁵⁹⁾。

400年前の時点になっても、世界人口のなかで国家に支配されていたのは、3分の2。残る3分の1は、国家も租税も徴兵もない、「桃源郷」で暮らして⁶⁰⁾いました。

日本列島周辺のばあい

現生人類が東アジア方面にたどり着いたのが、4万年前です。日本列島周辺には、1万5千年以上前から、縄文人と呼ばれるサピエンスのグループが食料恵受の移動生活を送っていました。3千年前になると、中国大陸、朝鮮半島から、新たに「弥生人」と呼ばれる集団が、青銅器、農耕・牧畜といった食料生産の技法をもちこみ、定住するようになります。弥生人たちは、北九州から瀬戸内地方を通して、近畿の肥沃な平野部を占拠し、村を形成して定着し、国家・権力者を持ち込み、農耕文明を始めます。国家を作らぬ恵受文化を維持していた縄文人たちは、弥生人に駆逐され、一部は南九州から沖縄の辺境部、他の一部は東北から北海道の山間部に追いやられ、一部は、弥生人と混血しつつ、国家を忌避して、逃亡し、「階級支配のない食料恵受社会」（原始共同体＝原始共産制社会）を守ろうとしました。

国立科学博物館のチームが縄文人の歯から抽出したDNAを解読したところ、現代の日本人は、縄文人のゲノム（全遺伝子情報）のおよそ10%を引き継いでいることは分かったということです。とくに北海道に住むアイヌの人々、沖縄に住む人々の間には、縄文人の遺伝子を引きついでいる比率が高いことが分かっています⁶¹⁾。他方、北九州から瀬戸内海沿岸・近畿中心部に至る地域では、朝鮮人の遺伝子を引き継いでいる住民の比率が高いとされています。

（続く）

注

- 1) 私の理論的な整理は、藤岡惇「ソ連の本質は「国家産業主義」だった」『立命館大学経済学』61巻特別号12, 2012年4月。
- 2) 非暴力主義アナーキストとでもいうべきガンジーは、一貫してソ連のスターリン主義体制には一線を画していた。宮沢賢治も、レーニンの「国家と革命」を読んだ後に「これはダメですね。日本に限って、この思想による革命はおこらない」と述べたという。大内秀明『日本におけるコミュニタリアニズムと宇野理論——土着社会主義の水脈を求めて』2020年、社会評論社、150ページ。同『賢治とモリスの環境芸術——芸術をもて、あの灰色の労働を燃やせ』時潮社、2007年も参照。マルクス・レーニン主義の教条の拘束を乗り越えようとした今一つの試みとして、池上 惇『人間発達史観』があった。ただし近代経済学の「経済人モデル」に拘束された面のあったことが惜まれる。
- 3) 鈴木有郷『ラインホルド・ニーバーとアメリカ』1998年、新教出版社、139ページ。
- 4) ユヴァル・ノア・ハラリ『サピエンス全史——文明の構造と人類』下、河出書房新社、2016年、182ページ。
- 5) デービッド・コーテン『グローバリズムという怪物』シュプリンガー東京、1997年。デヴィッド・グレーバー『ブルシット ジョブ——クソどうでもいい仕事の理論』岩波書店、2020年7月。
- 6) 藤岡惇『グローバリゼーションと戦争——宇宙と核の覇権めざすアメリカ』大月書店、2004年。
- 7) 池内了「宇宙像の変遷」、佐藤勝彦ほか『思惟する天文学——宇宙の公案を解く』新日本出版社、2013年、55ページ。
- 8) 佐藤勝彦『ニュートリノと宇宙創生の謎』実業之日本社、2012年、99ページ。
- 9) 谷口義明『宇宙のはじまりの星はどこにあるのか』メディアファクトリー、2013年、62-73ページ。更科功『宇宙からいかにヒトは生まれたか』新潮社、2016年、28ページ。

- 10) 佐藤勝彦, 2012年, 44ページ。吉田直紀『宇宙で最初の星はどうやって生まれたのか』宝島社新書, 2011年。
- 11) 佐治晴夫『宇宙の風に聴く——君たちは、星のかげらだよ』かたつむり社, 1994年。佐治晴夫『宇宙が教える人生の方程式』幻冬舎新書, 2017年1月, 75ページ。
- 12) 海部宣男「宇宙の輪廻・進化」, 佐藤勝彦ほか『思惟する天文学——宇宙の公案を解く』新日本出版社, 2013年, 235・241ページ。NHK取材班『NHKサイエンス・スペシャル「銀河宇宙オデッセイ2——超新星爆発」』日本出版協会, 1990年, 79-83ページ。
- 13) スティーヴン・ホーキング『ビッグ・クエスチョン』NHK出版, 2019年3月, 40-47ページ。
- 14) ポール・G・フォーコウスキー『微生物が地球をつくった』青土社, 2015年。ニコラス・マナー『生物界をつくった微生物』築地書館, 2015年。ロブ・デサルほか(斎藤隆史訳)『マイクロバイオームの世界——あなたの中と表面と周りにいる何兆もの微生物たち』紀伊国屋書店, 2016年, 8-11, 32-34, 56-58ページ。
- 15) 森達也『私たちはどこから来て、どこへ行くのか』ちくま文庫, 2020年10月, 202ページ。
- 16) 『京都新聞』ジュニアタイムズ版, 2020年11月29日。
- 17) 赤井純治『地球を見つめる「平和学」』新日本出版社, 2014年, 89-100ページ。更科功『宇宙からいかにヒトは生まれたか』新潮社, 2016年, 180-185ページ。
- 18) デヴィッド・スズキ(辻信一訳)『いのちの中にある地球』NHK出版, 2010年, 38ページ。デヴィッド・スズキ(辻信一・小杉恵訳)『きみは地球だ』大月書店, 2007年。
- 19) ウィリアム・クラーク『死はなぜ進化したか』三田出版会, 1997年。
- 20) 柳澤桂子『意識の進化とDNA』地涌社, 1991年, 6ページ。
- 21) 佐治晴夫「宇宙と人間像」, 佐藤勝彦ほか『思惟する天文学——宇宙の公案を解く』新日本出版社, 2013年, 74ページ。
- 22) 熱力学の第2法則の示唆するように、孤立した物理系では、事物は時とともに、拡散・分解・混沌の方向に変化します。いわゆるエントロピーが増大する方向に変わります。にもかかわらず、多様で美しいものを作り出す方向に宇宙や地球が変化してきたのはなぜなのでしょう。難問であり、私にも、確たる答えをもちえませんが、ただ付言すれば、米国の副大統領を務めたアル・ゴアは、ノーベル化学賞を得たイリヤ・ブリゴジンに触れて、次のように語っています。「ブリゴジンの発見は、『開いた系』は、……エネルギーの流れが続くにつれて、……より複雑性の高いレベルで自らを組織化するというものだった。……自己組織化によって、複雑な新形態が自発的に出現しうる……のだ」と(アル・ゴア『アル・ゴア未来を語る——世界を動かす6つの要因』KADOKAWA, 2014年, 16-19ページ)。地球は、外部とのエネルギーのやりとりがある「開いた系」であることに加え、おそらく宇宙には、未知の「ダーク・エネルギー」が隠されているでしょう。
- 23) 諸富祥彦『生きていくことの意味』PHP新書, 2001年, 53-65ページ。谷口義明『宇宙のはじまりの星はどこにあるのか』メディアファクトリー, 2013年, 54ページ。佐治晴夫「宇宙と人間像」, 佐藤勝彦ほか『思惟する天文学——宇宙の公案を解く』新日本出版社, 2013年, 62ページ。
- 24) ユヴァル・ノア・ハラリ, 2016年, 70-74ページ。
- 25) クリストファー・ロイド『137億年の物語——宇宙が始まってから今までの全歴史』文芸春秋, 2012年, 第1部-第3部。
- 26) ジェイムズ・スーズマン(佐々木知子訳)『「本当の豊かさ」はブッシュマンが知っている』NHK出版, 2019年10月, 228-232ページ。
- 27) ジェームズ・C・スコット『反穀物の人類史——国家誕生のディープヒストリー』みすず書房, 2019年, 39-40ページ。ノア・ハラリ, 2016年, 上, 河出書房新社, 9・104ページ。
- 28) アンドレ・ランガネーほか『人類のいちばん美しい物語——自然・文明・進歩』筑摩書房, 2002年6月, 39ページ。河合信和『ヒトの進化700万年史』2010年, ちくま新書, 143・149ページ。
- 29) ダニエル・リーバーマン『人体600万年史——科学が明かす進化・健康・疾病』(下), 早川書房,

- 2015年、145ページ。
- 30) ユヴァル・ノア・ハラリ, 2016年, 上, 70-74ページ。
- 31) ジョアン・C・トロント, 岡野八代『ケアするのは誰か?』白澤社, 2010年, 24-25ページ。
- 32) 樹木たちも, ある種の感性をもち, 協働していることについては, ピーター・ヴォールレーベン『樹木たちの知られざる生活——森林管理官が聴いた森の声』早川書房, 2017年, 12-21ページ。人類学者のクラストルも, 原始共同体社会の「生存維持経済」の安定性を強調している。ピエール・クラストル『政治人類学研究』水声社, 2020年1月150-151ページ。同『国家に抗する社会——政治人類学研究』1987年水声社, 14・26-30ページ。
- 33) 河合信和『ヒトの進化 700万年史』2010年, 55ページ。ユヴァル・ノア・ハラリ2016年, 上, 22ページ。
- 34) 森達也, 2020年10月, 92ページ。広井良典『生命の政治学——福祉国家・エコロジー・生命倫理』岩波書店, 2003年, 111ページ。
- 35) ユヴァル・ノア・ハラリ, 上, 2016年, 60ページ。
- 36) ラオスなどの「国家なき民」の実態をレポートするジェームズ・C・スコット『ゾミア——脱国家の世界史』みすず書房, 2013年(原著2009年)を参照。
- 37) 曹恵虹(秋山勝訳)『わたしの王国——「結婚のない母系社会」中国秘境のモン人と暮らす』草思社, 2018年。ナマケモノ倶楽部の辻信一さんとともに私は, 2009年3月4日から6日にブータン東南部のブリ村に滞在し, 母系制家族の実態に触れる機会がありました。モン人地域と同様の関係が, ブリ村周辺にも残っていました。自信に満ちた女性の気高さが印象的でした。
- 38) ダニエル・リーバーマン, 2015年, 219ページ。
- 39) ハラリ, 下, 2016年, 14ページ。
- 40) アンドレ・ランガネーほか, 2002年6月, 75-86, 88-101ページ。
- 41) ハラリ, 上, 2016年, 76ページ。
- 42) 龍村仁『地球のささやき』創元社, 1995年, 24-28ページ。
- 43) ジェイムス・スーズマン, 2019年10月, 234, 250-254ページ。
- 44) 「ネアンデルタール人と現世人類, 交雑を証明」『京都新聞』2020年6月10日夕刊。
- 45) ダニエル・リーバーマン, 2015年, 201ページ。
- 46) マット・リドレー(大田直子ほか訳)『繁栄——明日を切り拓くための人類10万年史』早川書房, 2010年, 18-19頁, 第2章。
- 47) アンドレ・ランガネーほか, 63-67ページ。
- 48) ハラリ, 上, 2016年, 99ページ。
- 49) James C. Scott, *Against the Grain: A Deep History of the Earliest States*, 2017. 著者のよって立つ思想基盤を知るには, ジェームズC.スコット『実践 日々のアナキズム——世界に抗う土着の秩序の作り方』岩波書店, 2017年, 同『モラル・エコノミー——東南アジアの農民叛乱と生存維持』みすず書房, 1997年(原著1976年)を参照。
- 50) スコット, 2019年, 44-54, 68ページ。
- 51) スコット, 2019年, 73-77ページ。
- 52) スコット, 2019年, 92-106ページ。
- 53) 稲村哲也「遊牧・移牧・定牧」ナカニシヤ出版, 2014年。アフリカ南部のカラハリ砂漠において進んだ狩猟・採集という食料恵受様式から農耕・牧畜という食料生産様式への移行の具体的な姿は, ジェイムス・スーズマン, 2019年10月, 314-329ページを参照。
- 54) 『京都新聞』2021年1月29日付け「凡語」より。表現は一部修正。
- 55) スコット, 2019年, 112ページ。
- 56) P. シーブライト(山形浩生ほか訳)『殺人ザルはいかに経済に目覚めたか——ヒトの進化からみた経済学』みすず書房, 2013年, 61, 187-188, 354-363ページ。

- 57) スコット, 2019年, 121-127ページ。
- 58) スコット, 2019年, 169-174, 189-232ページ。
- 59) スコット, 2019年, 128ページ。
- 60) スコット, 2019年, 13ページ。
- 61) 「ネアンデルタール人と現世人類, 交雑を証明」『京都新聞』2020年6月10日夕刊。